

# 書字につまずきを示す児童生徒の支援のあり方(4)

—書字に関する文献検討より—

池内美香子

KEY WORDS: 書字 児童生徒 支援

## （目的）

戸次・中井・榊原(2016)の調査で、協調運動の下位項目の微細運動や書字の発達が子どもの学校生活の QOL や精神的健康と関連していた。そして、教育現場での協調運動の発達が遅れている子どもへの理解と支援が求められているとしていた。豊かな育ちのために書字支援は必要であり、自分に合った方法で習得していくことが大切であると考えられる。本稿では、一人ひとりの児童生徒のよりよい書字支援のために、幅広く情報収集することを目的とする。

## （方法）

国立情報学研究所が運営する学術データベース CiNii、科学技術振興機構が運営する学術データベース J-STAGE でキーワードを「書字」として検索した。また、関連したものを収集するためにハンドサーチも行った。

## （結果）

### 【書字支援の実際】

吉田(2017)は、シュタイナー学校のエポック授業を紹介している。すぐ文字を学ばず、フォルメン線描で文字を書くことの基本となる直線や曲線の概念を学び、次第に複雑なものに変化させていき、丁寧に見て手で書いて写すことを感覚的に学んでいく。形の違いや共通点を語り描くことでリズム感覚、左右や上下のバランス感覚を育てられるとされている。文字と単語の学びでは、授業で教師が昔話やオリジナルの作り話、詩を読み聞かせた後、絵を黒板に描き、絵の中のモチーフが文字へと変化していく過程を示す。井田(1982)は、文字訓練でのモンテッソーリ型アプローチを紹介している。この特徴としては、書くことを読むことより先に行うことが挙げられる。

小林(2019)は、フランスの書字教育を紹介している。保育学校では、文字を書くため必要な手指の動きの学習を重視している。チョークやフェルトペン、砂や粘土も含めた様々な用材を用いている。

塩津・奥津・倉澤(2021)は、COVID-19 の影響で対面作業療法が難しくなったため、ICT を用いて遠隔作業療法を実施した。読み書きが苦手な小学生を対象として「いろんな作戦で漢字を書こう」などの活動を実施していた。本実践報告では今後への活用を願い、メリットと限界点、要改善点を挙げている。

### 【指導方法の検討】

早川・岡・中村・山下・岡(2021)は、低緊張の発達障害児に対し、傾斜板を用いた描写課題による施行時間と正確性への影響を検討した。結果、傾斜板を使用することで姿勢改善と目と手の協応評価が向上し、発達障害児の描画正確性の改善がみられた。

河村(2020)は、特別支援学級在籍児童の漢字学習での筆記回数と書きの再生成績の関係の研究を行った。5 種類の学習方法を実施した。今後の課題は、参加児童数を増やすこととしている。

西澤・中・銘莉・赤塚・小池(2019)は、定型発達児と LD 児を対象に漢字書字のリマインド再学習の効果検討を行った。書字の言語手がかりを学習しリマインド再学習する条件での学習は、書字手がかりの言語記憶の再固定化を効率

的にもたらし、書字の保持を促進させる効果的な手続きとした。

大西・熊谷(2019)は、漢字書字習得が困難な学習障害児に対しての認知処理様式や体性感覚入力方法などに配慮した学習法の効果を比較した。結果、体性感覚法は学習障害児の漢字書字の学習に有効とされた。

新庄・加藤・松島(2019)は、下敷きに紙やすりを用いて紙面上の抵抗を増大することが運筆コントロールの正確性改善に有効か検討した。結果、運筆コントロールが良好な児童には有効でなく、運筆コントロールが不良な児童には有効であった。今後の課題は、運筆コントロールだけでなく様々な要素を含んだ実際の文字での検証が必要としている。

### 【発達や書字に関する研究】

恵・鈴木・慎・安村(2021)は、定型発達児者を対象としてペンタブレットを用い、書字動態および ADHD、ASD 傾向の関連性を検討した。書字動態と ADHD 傾向には相関関係は認められず、ASD は発達障害傾向が書字動態に表出した。

伊藤・勝二・田原(2020)は、年長幼児を対象とし協調運動の困難さと描線能力との関連を検証した。結果、運筆能力が十分でない運筆操作困難児をチェックリストにより抽出できる可能性を示した。

東俣(2020)は、年長時の読み書き発達が小学 1 年時の書字習得度を予測する指標となるか検討した。結果、年長時のしりとり可否および名前の書字の可否が小学 1 年時の平仮名書字の誤りの特徴や生起数に影響することが示された。

岩田・橋本・柳生・室橋(2020)は、学習障害の生徒に検査や書字課題を行った。結果、木偏など「要素」を共有する漢字が多いほど修正を繰り返していた。書字障害の背景に「要素」の共有性により形態情報の競合が生じることで保持と処理が困難になる正書法ワーキングメモリーの弱さがあるとされた。

### （考察）

読み書きにおいてまずは文字を学ばないシュタイナー教育と、書くことを先に行うモンテッソーリ教育との読み書きの学ばせ方のちがいを知り、興味深く感じた。このような読み書きの学ばせ方について文献からは分からない部分もあるため、実際の指導についてより知っていききたいと思った。これらの教育が独自の体系に基づくこと、情操面も重んじていることなどを考えると、容易に取り入れられる部分ばかりではないと思われる。シュタイナー学校での実践が教科横断的な要素で学びを支えていた点など、支援のあり方を柔軟に考えるうえで役立つ部分があると考えられる。

書字に関連することについて、様々な視点から条件を変化させて学習方法や使用する用具の検討がなされていた。実践においては、児童生徒と指導者との関係性を大切に、個にあった方法を見つけるため適宜効果を確認しながら行うことが必要である。

(IKEUCHI Mikako)